

伊藤博文



* 吉富家文書145「伊藤博文写真」

解説

伊藤博文（1841～1909）は、山口県熊毛郡束荷（つかり、現光市）の出身です。幼名は利介で、俊輔、博文と称しました。

萩藩士の来原（くりはら）良蔵に見出された伊藤は、吉田松陰の松下村塾に学んだ後、1863（文久3）年いわゆる「長州ファイブ」の一人としてイギリスに留学。帰国後の翌1864（元治元）年高杉晋作の下関挙兵に力士隊を率いて参加しました。

明治維新後の1871（明治4）年から岩倉使節団の副使として欧米各国を歴訪し、帰国後工部卿を務めました。1878（明治11）年に大久保利通が暗殺された後は、政府の中心人物として活動しました。

自由民権運動の高まりをうけて国会を開設することになると、伊藤は、ヨーロッパに赴いて主としてドイツ流の憲法理論を学び、帰国後は自らが中心となって憲法の草案を作成するなど、憲法の制定に力を尽くしました。1885（明治18）年に内閣制度ができると、初代内閣総理大臣となり、四度にわたってその職につきました。1900（明治33）年には立憲政友会総裁として組閣するなど、政党政治への道を開きました。

日露戦争後は初代韓国統監となりますが、1909（明治42）年ハルビン駅頭で狙撃され亡くなりました。写真は韓国統監時代のものです。

* 当館には、伊藤博文が内閣総理大臣の肩書で出した文書として、木梨家文書89・90などがあります。